藤姫妖綺譚

-不治の病に冒されし若き娘よ-
-今ただこのひととき、男を愛するがいい。-
-この世の誰にも負けぬほどの愛を今、貫くがいい-

藤姫偃息図衆　第一夜　夜美の彼方　其之一幕

　私は暗闇の中で考えていた。 ただ一人、ずっと考えていた。
　夜の闇よりも暗い、いや、暗いとも認識できない、どれだけ時が流れたのかさえ分からない闇の中で
ただ一人、遠い昔の記憶の映像を眺めていた。
そんな私にも、時折、一筋の光が私の目の前を照らしてくれるのだ。
人が祈りを通じて私に語りかけてきた最中だけ、私は祈りに切実な思いを秘めて拝む人間の眼（まなこ）を通じて 天から地上を照らす暖かいアマテラスの光を見る事が出来る…。
　九十九（つくも）…。いつの頃からか私のお墓に一緒に住み着くようになった蛙の妖怪だ。 彼が一人ぼっちだった私の心にいつも問いかけ、私の瞳となってくれる。 おかげで私は、このお墓に縛られながらも闇の中でただ眠るだけではなくて、 時には生きた人間と触れ合う事が出来る。

　私がこのお墓に入ったのは１９の時だった。 それからもう、幾年の月日が流れたのだろう。
九十九の話によると、１２０年の月日があれから流れたみたい。 私が生きていた戦乱に満ちた世の中は、今は徳川様の天下となり、百姓一揆こそ所々で起こるものの、 大きな戦争はもう今の世には起こらないようだった。
そんな時代の男女なら、恋もきっと自由なんでしょうね。 私はそれを時々うらやましく思う。
　私は時々こう考える時がある。
人が何をもって幸せを感じるのか…。 それはたとえ、他人がどう言おうとも、周りの人間に私の気持ちを分かる人がいなくても、 もし、私の中にある気持ちが間違っていると感じないなら、本人が幸せと思えるならば、 それでいいのではないかと今になって思うのです。
　私は出来る事なら、もう一度、この世に生を受けたい。 この私を縛る忌まわしい恋愛塚から、私の魂をもう一度、この世に解き放ちたい。
　それが出来るかどうか分からない。 古来より、死してなお、この世に蘇りたい想いは、西洋の伴天連（バテレン）達がはるか海を渡って この土地にやってきた時にも外国のお話の中で説いていたようだし、 この国にも、男神（おがみ）イザナギが、死んだ妻のイザナミをこの世に蘇らせ

たい思いから、 黄泉の国を訪れた伝承が古くから残っている。

　それは単なる物語の上での空想だったのか、それとも、 古代には本当に黄泉の国から蘇ってきた人間がいたのか、どちらにしても、 人間は古くから永遠の命に深い魅力を感じていたようだ。私もその一人なのかもしれない。

藤姫偃息図衆　第一夜　夜美の彼方　其之二幕

　私の名は「藤」。 生きていた頃は藤姫様と呼ばれていた。
陸奥の地方のとある小国の戦国大名の長女としてこの世に生を受けた私は、
生活面では不自由する事は何一つ無く、私は大好きな琴の腕もみるみる上達し、
自分で言うのもなんだけど、見る目麗しい美しい女へと成長したと思う。
しかし…。
私は幼い頃より心の臓の病を患っていたのです。 少しでもお日様の下を歩こうものなら、
すぐに息が切れてしまう…。 明日をも知れぬこの命…。
皆の前では、平静を装っていたが、私の心はいつ、私は死ぬのだろう…。
そんな事を考えては、布団の中に潜り込んで、むせび泣いた夜も一度や二度じゃない。
そんな不安で押し潰されそうになる夜は、なかなか寝つけないものだった…。
昼と夜が交互にやって来るだけの毎日。
私の世話をしてくれる女中は私の世話を焼いてくれた。
でも、私にはなんとなくだけど、分かったの。
女中たちは私のいない所では私の事を不憫だと言ったり、 ひどいのになると、私の事を笑ってさえいる女中もいるだろうな、という事を…。
特にそれが顕著だと思ったのは、色恋話の時だった。
女中達は、この手のお話になると、お城の台所などで、それこそ蜂の巣を突いたような大きな

声で、
おしゃべりを楽しんでる風景を私も、 厠へ用を足しに行く時や、
お庭を軽くお部屋から眺めている時なんかによく聞くのでした。
私もその時は１７歳。そんなお話を聞いて、ドキドキしないはずがない。
だから私も、部屋へやってきた女中に、それとなく、色恋話をしたくて、
そっと、好きな男子の話なんかを振ってみたりしたのです。
しかし、私が話題を色恋話に向けると、皆、口を噤む（つぐむ）のです…。
何気ない話題なら、なんでもしてくれるのです。
例えば、昔は尾張のうつけと呼ばれた織田信長公が、ついに武田勢を打ち破り、
このままの勢いなら、 織田信長公が、天下を統一してしまうだろうといった、
今の天下の情勢の話とか、 女中の家族やお友達のお話なんかは、普通に話をしてくれるのです。
それが何故、私が私も皆と同じように興味を持ってやまない色恋話だけは、
まるで皆で取り決めた禁句のように、私の前では楽しくお話をしてくれないのだろう…。
私はいつ死ぬか分からないから、私を不憫に思い、だからきっと、そんな私の前では 誰も色恋話を持ち出す女中はいないのだろう…。
皆は私にめいいっぱいの気を遣ってくれているつもりでいるのかもしれない。
しかし、私も皆の前ではそんな皆の思いを汲んで笑い返してはいるものの、
私はそれを、 本当の思いやりとはどうしても思えなかった…。

普段、家族の前や、友達の前でしている普通のお話を、普通に話してほしかったのだ。

藤姫偃息図衆　第二夜　花の命

　花の命は短くて苦しきことのみ多かりき

なんとなく、これからずっと先の未来、誰かが歌って色んな人が知る事になるこの言葉がふと、藤姫の心の中を過ぎった（よぎった）。

死の眠りの中にいる時間は私ももう、死んだ時から１２０年もの月日が流れたわけだけど、
その間ずっと、生きていた時より疲れもだるさも感じない。
まるで、ずっと夢の中にいるような…。
私はその暗闇の中で、たまに私を照らすアマテラスの光が射した時だけ、目を覚ましたような心持だけが、 延々と、ふわふわと流れていく。

それは、私がこの土地にずっと縛られているからだろうか？
そのせいか、時々、遠い過去のものとも未来のものとも分からない不思議な映像が広がる
夢の中を彷徨う事がある。

カラクリが空を飛び交い、お城なんかよりもっと大きい縦長の、窓が数え切れないぐらいある建物や
見た事も無いお化粧や服を着た人たちが、狭い場所を数え切れないぐらい歩いている町や、
牙の生えた大きなゾウを石の斧を持って追いかけるひげもじゃの男達、
映像だけじゃなくて、時々、喜んでいるような声や、
時には耳を塞ぎたくなるような大きな悲鳴まで、
そんなものが 見えたり聞こえたりする時があるのです。

　花の命は短くて苦しきことのみ多かりき

私と同じような境遇の人が語った言葉 なのかな？と思った。
私の命も短くて、そして生きている間、苦しかった事が多かったと思う。
そして、死んでからも、私はこんなお墓に何故、ずっと、留まり続けないといけないのだろう？？

あの時代、私の世話を焼いてくれたり、一緒におしゃべりを楽しんだ女中たち、
私をあんな人のもとに無理矢理嫁がせた父上、夜叉丸、
そして双一郎様…、皆はどこへ行ってしまったの？？

　九十九一人がずっと私のそばにいてくれる。 彼が何故、私のそばにいつまでも
たった一人でついていてくれるのか私も分からない…。
あの日から１２０年間、訪ねる機会はいくらでもあっただろうに、
私は不思議にそれを一度も彼に訪ねた事がない。
彼も自分からそれを私に語りかけてきた事は一度もない。
　なぜだろう？？ しかし何故か、お互いそれを聞かずとも、
まるでずっと昔から顔なじみのような不思議な印象を、 私も彼も持っていたからかもしれない。

　「そうだわ、九十九。また久しぶりにお話しましょう。 誰かがお墓を訪ねてくるまでずっと寝てるのも、なんだか辛いものがあるの。」

　「よろしゅうございますよ姫様。どんなお話がよろしゅうございますかな？」

　「そうね。九十九がいつも話してくれる、百鬼夜行とか、
仲間の妖怪のまぬけ話も面白いんだけど、今日は 私がしゃべってもいいかな？」

　「どんなお話か、楽しみでございますな。」

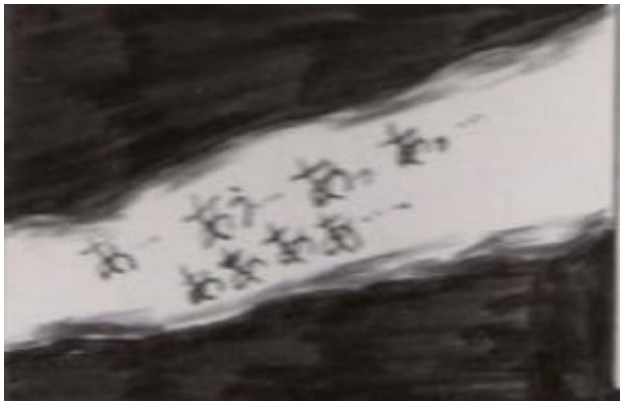
　「うふっ。昔、まだ心の臓の病を患ってた頃、
いつも私に楽しく話をしてくれた男の子がいたの。
 あんまり親しげにいつもお話をしていたから、
その時はまだ私もそれが私の初恋だなんて思わなかったわ。
でもね、今から思うと、それって初恋だったのかな？って思うの。」

　藤姫は、久方ぶりにアマテラスの光を浴びながら、少し俯き加減で目にはいっぱいの笑みを浮かべながら、 九十九に楽しそうに話をし始めました。

藤姫偃息図衆　第三夜　花営偃息図衆　其之一幕

　今を遡る事１２０年もの昔、私は病弱の一人の女だった。

　藤姫は久方ぶりにアマテラスの光を浴びながら、九十九に楽しげにお話を始めました。
藤姫がある晩、床に就いたものの、なかなか暑くて寝つけない夜があった。
布団の中で、必死に眠ろうと目を瞑って（つむって）
目の前に広がる暗闇を必死に見えなくなるまで 見つめていた時、
ふと、庭から呻き声とも歓喜の声ともしれない声が聞こえてきたのです。



　「あ…、あう…、あっ、あっ…、あああああ…。」
さっきからなんだろう…？？？
まさか幽霊？？物の怪の類がお城に住み着いたのかしら？？

　藤姫は正体の知れない声が段々怖くなり、布団の中で、ますます心をドキドキしながら暗闇を見つめ続けた。
四刻半（３０分）ほど過ぎただろうか？
庭から聞こえる正体の知れない声はまだ、藤姫の部屋にも聞こえてきます。
こんな時にどうしよう…。
おしし（おしっこ）がしたくなってきた…。
厠へ行くには、どうしても庭前の廊下を歩いていくより他は無く、藤姫は意を決して、庭の幽霊に
気配を悟られないように、そっと、部屋の障子を開いて、庭の様子を窺う事にしました。

　「姫様に聞こえちゃう…。でも…。だめよ…。もうダメ…。
あっ……。あああああああああああああ！！！！」
それは藤姫も予期もしなかった光景だった。

　暗がりの中で叫び声を上げていたのは、若い小姓と、
私の部屋へも出入りしている女中が夜の闇に紛れ、
なんといつの日か、枕絵が描かれた書物で見た事がある行為に励んでいたのだ！！

　男にあって女にない物。

その二つを互いを補い合う形でまぐわうこの行為、
私はずっと前に一度、今はもう女中を辞めてしまったけど、
とても仲良くしていた私の数少ない女友達の「加代」が、
私にこんな本を見せてくれた事があった。

花営偃息図衆（かえいおそくずしゅう）

　「これははるか遠く、明の国から海を渡ってきた書物だと、
私、姫君の乳母様より聞いた事がございます。
他国では、姫君が殿方と婚礼の儀を結ばれた時に困らぬよう、
夜の作法の所作を学ぶため、こういった書物を
夜、ご就寝される前に読むのが慣わしになっているのでございます。
 しかし、姫様は…。
だから乳母に見つからぬよう、こっそりお持ちいたしました。」

偃息図と書いて、「えんそくず」、または「おそくず」と呼びます。
平安時代の初めぐらいの時期から描かれ続けてきた性的題材を主題とした絵画で、後に江戸時代には 「春画」と呼ばれる事になっていくのです。

藤姫偃息図衆　第三夜　花営偃息図衆　其之二幕

　加代は、意地の悪い部分も少し持ち合わせた性格で、
乳母もこの本の事については半分もうろくしていて、
すっかり管理してないので、私にこっそりくれるという。
最も、もしそれが見つかって、乳母が加代を攻める事があっても、
私が加代を庇って、お咎めなしにするという約束も認めての上だったわけだけど。

　私はドキドキした気持ちで、でも、どうしても知りたくて、
加代に、もう一つ、こんな事を聞いてみたのです。

　「他国のお姫様が、私ぐらいの年頃で、自分が嫁ぐ殿方の事を想い、
何を学んでいるのか、 分かりました。
では、殿方は、私達花嫁を迎える際、どのようにその所作を学んでおられるのでしょう？
やはり、私達、女のように、こういった偃息図（おそくず）が描かれた本を嗜んで、
所作を 学ばれているのでしょうか？」

　「いえ、殿方の場合は、私達、乳母やお付きの女中が、
元服なされた時、その夜に体を張って 夜の所作をお教えするのです。
姫、面白いのはこういった夜の所作は人間、
誰しもがこの世に生れ落ちた時から心の底に秘めている欲望でございます。
人として生れ落ちた時から、この欲望にあらがえる者など
無きに等しいといっても過言ではないでしょう。
どれだけ勇猛果敢な鎧武者だろうが、どれだけ優しく清らかな心を持つ女でも、
この、心の中に潜む獣だけは 皆同じ形をしているのです。
その獣の飼いならし方はまさに千差万別、人それぞれで、人間万流とでも呼べばいいのかしら？
そこには男も女も関係が無く、姫様のように病弱な女子（おなご）でも、

健康な女子でも違いは無いのでございます。
姫様が、心の中の獣と上手に向き合う事ができ、
素敵な殿方と巡り会える事を、加代は お祈りいたしますわ。」

　それから私は毎晩、あれから家の都合で他国に引っ越していった
加代が渡してくれた花営偃息図衆を いつも布団の中で眺めていた。
　私も、殿方のそれは見た事がない。 女はおしし（おしっこ）をする時、
時折、股を伝って、お尻の方に流れてきたりする事がある。
あれは結構、いい気持ちがするものじゃないのだ。
殿方のそれは、とてもおししがしやすそうだと、藤姫は思いながら、書物をめくっていく。
しかし、殿方のそれは、本当にこの本に描かれてるぐらい大きいものなのかしら？
確かに、私の女の部分には指を入れる事が出来る。
でも、男のそれが完全に勃起した時、この絵で見てると、
どう見ても私の腕と同じぐらいの太さがあるのだ…。
それを見てるとなんだか、ドキドキする気持ちが半分、怖い気持ちが半分といった 微妙な感覚になっていくのです…。

　でも、殿方のそれを思い浮かべるたび、
私が殿方に優しく抱かれている姿を思い浮かべるたび、私の女の部分は
とても何かを感じるようになっていくのです。
これが、加代が言い残していた、私の心の中にも住んでいるという獣なのだろうか？
それは、「ぬえ」のような姿をしているのだろうか？それとも「鬼」や「天狗」？
いつも、そんな事を考えながら、頭の中で想像を張り巡らしていた行為が、今、目の前で行われている。
藤姫は先程まで感じていた尿意も忘れるほどに、目の前で行われている行為をまじまじと眺め続けた。

　私もいつか、愛する人と、ああやって楽しく睦み合って、
出来れば、愛する人と一緒に子供も生んで、 共に家族として歩んでいきたい。
　しかし、なんとなく予感がするのです。 私は、そうなる前に、この世の者ではなくなるだろうと…。
そう思うと、私はいつの間にやら暖かい物が頬を伝い、私の女の部分は涙のように激しく濡れた…。
私が失禁してしまった事に気づいたのは、それからしばらく経ってからの事であった…。

　蛙の妖怪「九十九」は、じっと藤姫の話を静かに聞き入っていた。
　人間の女性が心に秘めている想い、それとは遠くかけ離れた男、
それも妖怪の自分にどこまで その話の意味が理解できているのかは分からないが、
姫の話をただただ聞き入っていた。
それと同時に、九十九は、口には出さないが、一つの思いをずっと心の中で考えていた。

　「いつの世でも、女性のおしゃべりの話題は尽きないとは、誰が言ったのか知らんが、
よく言うたもんよ。
そういや、姫様の初恋の人の話は、一体いつ出てくるのかのう…。」
　藤姫の久しぶりのおしゃべりはまだ続きます。

　加代に、明の国から伝わってきたと言われる花営偃息図衆を見せてもらって以来、
時折、夜、寝る前に布団の中で、私は殿方の事を想像しては、
一人ドキドキしたり、時には枕を腕に抱いて ジタバタ暴れてみたりする事が多くなった。
　私、頭がどうかしちゃったのかな？
　他国のお姫様は私みたいにお布団の中でこんな風に寝転がりながら暴れ回ったり、
一人、笑いがこみあげてきてしまったり、自分がまだ見ない殿方と結婚して、
殿方に抱いてもらってる自分の姿を想像してドキドキして興奮してしまったり、
自分で女の部分に指を入れて気持ち良さを感じたり、そんな事をしてるのかな？？
加代がもしいたら、こんなお話も出来ただろうに、残念だなぁ…。
　私と同じぐらいの年頃の殿方も、自身の男の部分や、
私たち女の事をこうやって夜毎に考えて、同じように
ドキドキしたり、身悶えしたりするのかな？？

　藤姫は床に就きながら、両手を口にあて、
少し頬を赤く染めらせながら天井を見つめながら、目はキラキラと
大きく見開いたり閉じたりしながら、色々な事を考えるのでした。

　藤姫は、一つ父上や周りの女中にも話していない秘めた一つの感情が、
この頃少し、胸をもたげるようになってきた。
それは、男と女、私はまだ、男と言えば、お城の中を歩く武将たちや時折お顔を会わせる父上、
庭師の男や、今、 京の都辺りが騒がしい西国の動きを掴むため、
小田原城近辺まで密偵の命を受けてお城を空けている 私の幼馴染の「夜叉丸」以外知らない
けど、
こうやって、互いの分からない事をあれこれ想像してみたり、
まだ見ない自分の恋人、夫となる人の事、 その方のお世話をして過ごしている自分の姿、
今まではおしし（おしっこ）を出すだけのための場所だと
思ってた部分をそっと撫でてみると、
そこの部分にだけ体のどこの部分を触ってみても感じる事が
出来ない不思議な感覚を感じたりしているのでしょうか。
　そう考えると、男と女、体の形や心の奥底の感情はやっぱり男の想い、
女の想い、違うものなのかもしれません。

　でも、互いの愛しい部分、私たち女を殿方が思いやる心、
私たち女を思う殿方の心の奥底の気持ちは、実は同じなのかな？と私は考えるのです。
　この戦乱に満ちた世の中、私もそうなのですが、女は自分の愛した男の血筋を途絶えさせない事、
そのためにはもし、父上や、私にはいないのですが、もし兄上がいたとして、

もし父上や兄上、この先、私が嫁いだ先の殿方がもし望めば私自身、たとえそれを望んでいなくとも、
他国へ人質として赴いたり、私がこんな殿方に身を任せたいとは
思えない男のもとへ嫁いだりしないといけないのです。
　それを、他国のお姫様や、私を育ててくれている乳母や女中は女として生まれた誉れと言います。
私も、それをまだ、子供の頃は疑ってもいませんでした。 しかし、それってほんとなの？？

男が男の望むように生きているのならば、女には女の望む生き方は許されていないのでしょうか？
極端な考えなのかもしれません。でも、私にはそう聞こえてくるのです。
この話は、私が胸の中に秘めた秘密です。
こんな話を聞いて、私に賛同してくれる女中や、お姫様は多分、
この日の本全体を見ても、そういないでしょう…。
面と向かって話せば、私の気がおかしいとしか誰も見てくれないでしょう…。

それから数日後、いつものように、私は部屋で書物を読んでいると、女中が私の前に駆け寄ってきました。
　「何事ですか？騒々しい。」

　「はい。姫様の幼馴染の夜叉丸様が、小田原よりご帰還なされました。
姫に是非ともお目通り願いたいとの旨にございます。いかがいたしましょう？」

　「まあ♪　それは本当に嬉しい事ですわ♪
さあ。夜叉丸を早く呼んできなさい。」

　「はい！」

　夜叉丸に会える。もう何年会っていないだろう？？
久しぶりに気を許して会える異性の友人に、藤姫は嬉しい気持ちで胸がいっぱいになった。
同時に、胸がドキドキする高鳴りを抑えながら、藤姫は夜叉丸を待った。

「姫様。本当にお久しぶりでございます！」

　「あっ！夜叉丸！本当に久しぶりね！さあ、もっと、私の近くまで来てください。」

　夜叉丸は子供の頃よりこの城に本当によく使えてきてくれた小姓でした。

しかし最近では、父上から重大な任務も与えられ、
今回は北条氏の治める小田原まで西国の偵察に 赴いていたのです。 簡単な仕事ではありません。
もし、敵方に見つかれば、命をも落としかねない危ない仕事です。
出来れば、本当は夜叉丸には私もこんな仕事をしてもらいたくはないのです…。
しかし、父上には父上のお考えがあるのでしょう…。

　夜叉丸はいつも旅先での出来事や、出会った人達の事、
おみやげなんかを私にくれたりします。

　今日はどんな話をしようかしら？

　私の胸は先程からドキドキが止まりません。

　私も今日はとても気分がいいので、少しお庭に出て、
夜叉丸と一緒にお散歩しながらお話をしました。
そっと手をつないでみたりなんかもします。 すると何故でしょう？
前に夜叉丸とお話した時はこんな事なかったのに…。
まるで、私の指先から、稲妻がビカビカッ！と流れたような感覚が私の体の中を流れるのです。
なんだか、私もいつかの夜のように、おしし（おしっこ）を漏らしてしまった時のような…、
でも、それとは違う何かで濡れてしまっています…。

　やっぱり、あの時以来、私の中で何かが変わってしまったのでしょうか？

　他国のお姫様も、幼馴染の男性と会うだけでこんな事になるのでしょうか？

少しだけ考えてしまいました…。

　「姫様。胸の病の方を私も旅先でもずっと気にかけておりましたが、
お元気そうでこの夜叉丸もほっと一安心できました。」

　藤姫は満面の笑みを浮かべながら夜叉丸を見つめます。

　「あなたもご無事でよかった…。密偵などと、父上もどこかの忍者にでも頼めばよろしいのに…。
 でも、便りの無いのが無事の知らせとも聞きます。
ほんとに久しぶりに会えて嬉しいですわ。」

　「姫様！今回の旅で得たおみやげをまた、私も早く姫様にお渡ししとうございます。」

　「まあ♪　私も早く見てみたいですわ。　小田原でのおみやげはどんな物なのでしょう？」

　「それがなんと姫様！　お喜びくだされ！ 姫様の胸の病、
治す事が出来るかもしれぬ丸薬が手に入ったのです！！」

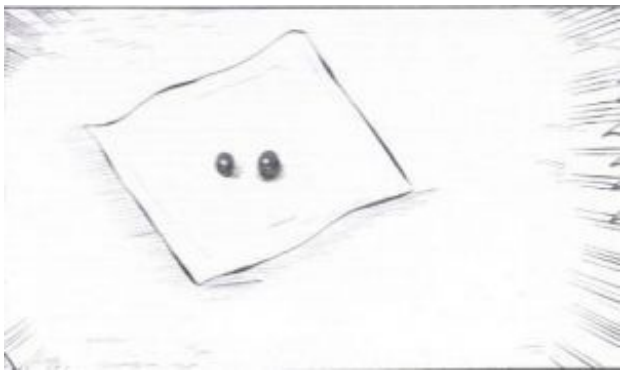
　夜叉丸は少し興奮気味に藤姫に、自分の今回のおみやげの話を語りました。

　自分の胸の病気が治る！？ もし、それが本当なら、
私も女中たちと一緒に城下へお花見に出かけたり、 お散歩する事も夢じゃなくなるのです。
　元気に走り回っても、もう、すぐに息切れしたり、
他の女中や家臣たちに気を遣わせる事もないのです。
　それどころかもっと大っぴらに、女中たちとおしゃべりを楽しんだり、恋や私が普段思ってる殿方についてのお話や少し品のないお話もこっそり楽しむ事が出来るかもしれないのです！
こんな嬉しいおみやげ、他にあるでしょうか！

　私は早く、その丸薬を飲んで、心の臓の病を治したい気分でいっぱいになりました！

藤姫偃息図衆　第五夜　如意宝珠　其之一幕

「夜叉丸。これがあの噂に名高い伝説の秘薬『如意宝珠』か！？」
　薄っすらとなまず髭を口の上に生やした身なりのいい男が夜叉丸に向って問いかける。



「はい、西国の北条氏の動向を探っておりました時、
ふと立ち寄った鎌倉の寺で 住職より譲り受けた品。
この妙薬が私や姫を持ち主に選んだと住職は申しておりました。
摩訶不思議な空気を感じる寺でございましたが、住職には並々ならぬ神々しさを感じました。」

「で、その坊主より譲り受けたこの丸薬が、なんだと言うのだ？
こんな物が、西国の北条や、越後の上杉、
尾張の織田どもでさえ持っていない宝だと言うのか？
わしの目にはそのような大層な品には見えんのだがな。」

夜叉丸が話をしていたのは、自身が仕える主君でした。
小国であるが故、どこの戦国大名と繋がりを強化すれば、自身が生き延びる事が出来るか、
藤姫の父親であるこの殿は、頭を悩ませていたのです。
夜叉丸は、西国の北条の動きや、特につい最近、京都に上洛した織田信長という男に関しての
情報は、出来る限り、調べ尽くして、故郷の国へと帰ってきたのです。
しかし、今、この場で話されている話の内容は、どうもそれらとは趣きが違うようです。

「殿。如意宝珠とはかつて、月の国よりやってきたと言われる
迦具夜姫（かぐや姫）が時の帝に 託したと伝えられる不老不死の妙薬。
しかし、それから何百年もの歳月が流れ、この丸薬には
もはや不老不死を得る事の出来るほどの 霊力は残ってはいないと、住職より聞き及びました
が……。」

「それでは、この丸薬は大層ないわれがあるだけで、もはや何の役にも立たぬ代物ではない
か。」

「いえ。確かにかつてほどの霊力を宿しておらずとも、
姫のご病気を治す事ぐらいの霊力は 今でも持っていると思うのです。
殿。この丸薬を是非とも姫様に献上しとうございます。 お許しを。」

「ふむ……。この薬を娘にの……。
夜叉丸よ、この丸薬、実はの、わしも伝え聞いた話があるのだ。 実物を拝めるとはまさか思わなんだが……。」

！？

先ほど、殿はこの丸薬の事など存じてないとおっしゃっていなかったか！？

「そうか……。この薬がそうなのか……。ふふふふ……。」
夜叉丸は、自分の主君の口元に、怪しげな笑みが浮かぶのを見逃してはいなかった。

「なんでもな、夜叉丸。この薬はすり潰して飲めば、
どんな願いも叶うという言い伝えも あるそうなのだ。
分かるか？　もし、その言い伝えが誠ならば、もう上杉や伊達、
織田や北条の動きなど、気にせずとも良い。
尾張の織田信長を打ち倒し、越後の上杉謙信を打ち倒し、
近隣の伊達をも破り、 このわしが戦国の覇者となる事も夢ではないのだ！！
いや、大陸の明の国をも、我が手中に治める事も、帝に成り代わり、
関白、いや、わし自らが 帝になる事さえも叶うやもしれぬのだ！！
夜叉丸よ、よくぞ、如意宝珠を持ち帰った！
もし、これが本当の如意宝珠ならば、そちには格別の待遇を与えてやらねばならぬ。
本当によくやったぞ！　はははははははは！！！！！」

　そんな……。 この丸薬は、いくらたまたま手に入れた物だとはいえ、
そういう目的のために手に入れてきた品ではなかった。
夜叉丸は、幼い頃より、病弱で外もろくに歩けないとはいえ、
藤姫とお話をしたり、 ともに遊ぶのが大好きだった。
よく、乳母に見つかって、男の子と遊んではダメだと姫が怒られたり、自分も怒られたりもした。

　ある日、姫が大事にしていたお人形を、乱暴に扱ってしまって壊してしまった事もあったものだ。

　「夜叉丸なんて大っきらい！！もう、私の部屋に、二度と来ないで！！」

　姫に大っきらい！！と罵られてしまった時は、
姫も手がもげてしまった人形を抱きかかえながら泣いていたが、自分も、

　「なんだい！！お人形が壊れたぐらいで！！　だから、僕、女の子なんてすぐ泣くから嫌いなんだ！！　僕ももう、姫様となんて遊んでやらないんだから！！」

と、姫に悪態をついて部屋を飛び出したものだった。
悪態をついて飛び出したわりには、
姫様の部屋を出たすぐ目の前の庭先でグズグズ自分も泣いてしまい、
お互いに自分たちの泣き声が聞こえてる場所で泣いてしまって、
二人とも余計に 涙が止まらなくなったのも、今ではいい思い出だ。

　姫様とは、幼い頃からずっと、そういう友達でいたからだろうか。
年頃になると、自分も姫様の女性を意識するようになった。
姫様の事を考えると、胸が急に膨らんだかのように圧迫されて、
呼吸が荒くなる。 頭が回らなくなったりした事もあった。
それだけではない。姫様が幼い頃より心の臓の病を患っている事に夜叉丸も、ずっと
不憫でならず、出来る事なら自分が代わってあげたいとも、長年、子供の頃から 思い続けてきた。
殿も、何も語らないが、武士の父として、また、武士の娘として、心中、自分と同じ辛い思いを
口に出さず、耐えておられるのだとずっと信じてきた。
この如意宝珠が思いもかけず、手に入った時、夜叉丸の心の中には、病気が治って
喜ぶ姫様の姿や殿の姿が何度も過ぎった（よぎった）のです。

しかし、今、目の前の殿は、なんて言った！！？？

　この薬があれば、自分が帝になれる！？

　この薬があれば、この日の本どころか、大陸さえも手に入る！？

自分はそんな事のために、この薬を持ち帰ったのでは決してなかった。
隠密が主君に意見を挟むなど、たとえどのような事があろうと、
やってはいけない事のはずだった。
しかし、自分は我慢が出来ず、殿に諫言を申し立てたのだ。

　「何をおっしゃられます！その薬は、姫君の病を治すために手に入れた物でございます！
断じて、あなた様の野心を叶えるために手に入れた物ではございませぬ！！
もし、ご自身の野望を叶えるためにのみ、使われるとあるのならば、
この夜叉丸、命に代えても、その薬を返していただきとうございます！！」

　夜叉丸の言葉を聞いた殿は、癇癪を起こし、夜叉丸を怒鳴り立てた。

　「黙れ！夜叉丸！！貴様、たかが隠密の分際で、誰に向こうて偉そうな口を 叩いておるのだ！！
誰が貴様などに、跡継ぎでもない娘にこの薬をくれてやるいわれがあるというのか！！
これさえ手に入れば、この世に怖い物などもはやわしには何も無い！！
貴様のように、女子との感傷に浸る隠密など、ただのクズよ！！
誰がお前を拾い、そこまでにしてやったと思うのか！！
もはや貴様などに用は無い！！ 死ね！！！」

（夜叉丸……。）

「九十九……。少ししゃべりすぎた……。 少しだけ、休んでもいいかな……。」

「よろしゅうございますとも、姫。」

「じゃあ、ちょっとだけまたお墓に戻ってお昼寝してくるね。
また続きは、いえ……。ここから先はちょっと……。また気が向いた 所からお話するわね。」

「そうですね。私は姫様がお目覚めになるまで少しばかり私も

森の中でもブラリと散歩でもしてきます。」

「うん。おやすみ。九十九。」

長い間、昔の自分の話に久しぶりに夢中になったせいか、
少ししゃべり疲れていた のもあって、私はすぐに眠りについた。
藤姫の寝顔は、微笑みを浮かべてるようにも見えたが、
なにか辛い夢も 見えているのだろうか。 時折、寝顔がひどくひきつった……。

夢の中の藤姫は一人、お城の庭に出て、東の夜空に浮かぶ赤い三日月を眺めていた。
今日の月は三日月にも関わらず、何故かいつもより大きく見える。
少し北の空の方へ目を向けると、天の川が南に向って夜空を横切るように
明るく光り輝いていた。
天の川といえば、昔、乳母が話してくれた昔語りがあった。
それは、織女星と牽牛星の伝説だった。
織姫は天界を治める天帝の娘で、機織りがとても上手で真面目な娘だった。
牽牛は牛飼いの青年で、彼もまたよく働く真面目な男だった。
ある時、二人は互いに一目惚れをし、とても仲睦まじく逢瀬（おうせ）を楽しんだ。
天帝と、織姫の母「西王母」も、二人の仲の良さと、牽牛の事をとても気に入り、 二人の結婚を認め、二人はめでたく夫婦になったのだった。

しかし、二人は夫婦生活がとても楽しいあまり、
すっかり二人でいる事に夢中になり、 いつしか織姫は機を織らなくなり、
牽牛は牛の面倒を全く見なくなったのだ。
元が真面目な二人……、織姫と牽牛は知り合うまで全く男女の逢瀬をかわした事が

なかった事もあったのだろうが、機織り機はほこりをかぶり、クモの巣がはびこり、
牛は全く主人が面倒を見てくれないせいで、すっかり弱り切って死んでいく牛もいた。
あまりの酷さに怒った天帝は、二人の間に巨大な洪水を起こし、
その水の流れは 巨大な天の川となって二人を引き裂いてしまった……。
織姫はそれはそれはたいそう悲しみ、涙が枯れ果てるまで泣いたという……。
年月が経ち、もう、互いに会う事が出来ない事を悟った織姫と牽牛は、悲しみに
暮れていてももはやどうしようもない事に気づき、
また、牽牛は牛を追い、 織姫は機を織るもとの生活に帰って行った。
あの時と違うのは、二人が出会う以前にはお互いに心の中になかった深い絶望と、 悲しみが心の奥底に隠れ住むようになったという事だった……。

　それはそれで、あまりに二人が哀れすぎる……。
天帝は、密かにカササギに ７月７日、７が重なる双七の日にだけ、
天の川に架け橋をつなぎ、織姫は一年に 一度、その日だけ、
橋を渡って牽牛に会いに行く事ができた。
二人はその日を心待ちに、以前にも増して仕事に励むようになった。
しかし、もしこの双七の日に雨が降ると、天の川の水かさは増し、二人は 会う事が出来ず、次に会うにはまた一年の歳月を過ごさなければならなかった……。

藤姫偃息図衆　第六夜　赤い三日月　其之二幕

　藤姫は幼心に、この話を乳母から聞くのがとても大嫌いだった……。
なぜ、愛し合っているのに二人はずっと、一年に一度しか会えないのだろう……。
しかも一年待っても、もし雨が降ってしまうとそれだけで二人は会えず、
もし、そんな事が二年も三年も続いたらどんな気持ちになるものだろう……。
七夕の日に降る雨は、牽牛と織姫が流す涙だという……。
二人に気持ちを想うと、たまらない気持ちが幼心に押し付けられるように
藤姫の胸は圧迫された……。
　しかし、自分はなぜ、この七夕の話が嫌いでならないのだろう？
何故かこの話は、私自身も訳が分からないが、ひどく私のカンに触るのです……。
　それに、赤い三日月が昇る夜は、私は何故か酷く不快な気持ちを覚える出来事が昔から多かった。

　あれは、私が十二の時だったろうか。 ある日、私は自分が死ぬと思い、酷く泣き叫んだのです。
乳母や女中たちも、私が泣き叫ぶ声を聞いて、慌てて私の寝室へ駆けつけたのです。
何事かと思い、必死の表情でやってきた乳母達は、布団を見て、一斉に 笑い出しました。
そしてついには、

　「まあ！姫様！おめでとうございます！！」

　「なんとおめでたい！　今日はお赤飯を炊いてお祝いをしないと！」
とまるでめでたい事があったように喜んだ声で私にしゃべりかけるのです。
　私は全く訳が分かりません。
私の座って泣いている部分のすぐ真下の布団は血で真っ赤に染まり、

私の 寝着も真っ赤な血で汚れているのです。

　「なんで！！何がお赤飯を炊くようなおめでたい事なの！？
こんなにたくさんの血が……。私、いよいよ死ぬんだわ！！」

　もともと、心の臓の病を患ってた事もあって、私は酷く動揺していた。
乳母は泣き叫んで取り乱す私に、落ち着いて今起こってる出来事を 話して聞かせてくれた。
　「姫様。あなたは、大人の女性の仲間入りを果たされたのでございます。
女は誰しも、人によって前後はございますが、月に一度、そうやって女の部分より
血があふれ出すものなのでございます。
しかしそれは、恐ろしい病でもなんでもありません。
姫様のお体が、一人の女として、
子を宿す事が出来るようにおなりあそばれた印なのでございます。
人によっては、この時、激しい痛みを伴う女もおります。
なぜか、ひどい不安に駆られたり、よく分かりませぬが、人を怒ったり、なじってしまう
時もあります。私はそうでございました……。
しかし、私に女の作法を教えてくれた師が、それは、女は男と違い、女は月に一度、
自分の体の内なる声を聞く事ができると教えてくれました。
辛い時、悲しい時、泣きたい時、体の調子がおかしい、自分の心の様子がおかしい、と
教えてくれるのです。 お赤飯は、そのお祝いに炊くのでございますよ。」

「まあまあまあまあ！ばあや！姫様。私の友達も初めての時は不安に
なってたりしたものですが、皆にお祝いしてもらって、
『ありがとう…。』って、 泣いて喜んでた子もいました。今は驚かれるかもしれませんが、
本当におめでたい事ですよ。」

加代も乳母と一緒に、いっぱいいっぱい泣きじゃくっていた私を慰めてくれた。

「ねえ、加代……。あなたもこんなに血が出たの……。」

　「あああああ……。私の時は茶色っぽい血がちょっとついてた程度でしたけど、
まあ、これは色んな人がいますわ……。
姫様はこうだったっていうだけですよ。」
　大人の女になった印と聞いて、私はちょっぴり嬉しくなった。
でも、こんな事がこれから毎月のように起こるのを思うと、ちょっと憂鬱にもなったり、
不安も感じたり……。

色々あの時は複雑だったなあ……、と、あれから五年近く経った今では思います。
　あの日、皆が赤飯を炊いてくれて、女中がそろってお祝いをしてくれた時は、
私も皆の気持ちが嬉しくて、自分自身も嬉しくて泣いちゃった。
あの日の夕刻、少し休もうと思って縁側から空を眺めた時も東の空には赤い三日月がのぼっていた。

　何故だろう……。私がいつもなにか胸騒ぎを感じたり、不安に感じたりする時は、
ふと 空を見上げると必ず赤い三日月が浮かんでいるような気がした……。
そんな時は必ず、あの大嫌いな七夕のお話を思い出してしまったりもする……。

　今もそういやさっきからだ。 嫌な胸騒ぎがする……。
ひどく胸が圧迫されるような……。 心の臓の病とはまた違う……。
　私は一抹の不安を感じながら、また自分の部屋へと帰る事にした。

　その時だった……。

藤姫偃息図衆　第七夜　無常の理　其之一幕

お墓の中で眠りにつく藤姫。 アマテラスの光から遮断されたその空間で
姫が 深い意識の奥底で見る光景は、姫にとって、大切な思い出となった
あの人との永劫の別れになるあの日の風景だった……。

愛別離苦……。どんなに深く愛し合った人でも、人は生き、
いつかは死ぬ運命にあるのならば必ず別れの時が来る……。

それはどんな者でも決して逃れる事のできぬ運命なのは仕方なき事……。

しかし、私には何故、もっと違った運命を歩める道がなかったのだろうか……。

彼女の心の奥底にはそんな想いが絶えず、ひしめいていたのかもしれない……。
魂に刻まれた記憶が時折、意識の表面へその光景を呼び覚まし、
彼女の表層意識に それを何度も見せつけるのだろう……。

何故、私はこんな事を何度も……。

何故、私はこんなお墓の暗闇の中へ封じ込められているのだろう……。

何故、私は何度も夢の中で生きていた時の忌まわしき思い出の世界を、
無間地獄のように 歩かなければならないのだろう……。

お墓の中で眠る藤姫の目から、一筋の涙が頬を伝い、流れていた……。

　そう、あれは赤い三日月が不気味なくらいによく輝いていた夜の事だった……。
私の嫌いな七夕の伝説を思い出し、気分が晴れないので自室で一眠りしようと、
布団へ入ってからしばらくしてからの事だったと思う。
　不意に城内が騒がしくなった。 大声で怒鳴ってる罵声や、
廊下を大勢の兵士が走り回るけたたましい足音、
「探せ！探せ！」
と誰かを探しているような大声……。
まるでお父様に逆らった裏切り者を探し回っているような物々しい空気を感じ、
私は先程から感じている嫌な予感がつい、そこまで押し寄せているかのような、
胸が圧迫されて、今にも息が詰まりそうな嫌悪感を感じずにはいられなかった。

　それからしばらくしてからの事だった。
胸と胸の谷間の中央がまるで稲妻がいきなり何筋も走ったみたいな
恐ろしい痛みがその瞬間、ほとばしった！！

痛い……。胸が誰かに激しく抑えつけられてるみたい……。
息が……。息を吸おうとしても、口から少しずつしか空気が入ってこない……。
目の前が不意に暗くなり、何度も火花みたいな光が飛び散る……。
首から肩の骨が悲鳴をあげてるみたいに、ズキズキ痛い……。

痛いよ……。痛くてたまらない……。 息をするのもだんだん苦しくなってきた……。
　あまりの胸の痛みや体の痛みに耐え切れなくなった私は、少しでも楽になりたい
思いで痛みをこらえながら、布団の上へ少しずつ倒れ込むように、
横になった。 しかし、痛みはおさまらないどころか、却ってどんどん増していき、
目の前も、まるで高熱が出て止まらない時のように、風景が虚ろにしか映らない……。
今まで、心の臓が時折、激しく痛み、そのたびに、
もうこんな痛みから何度も逃れたいと思った事はあったけど、
今夜のそれは今までのそれとは比較にならない痛みだった……。
目の前をさっきから、黄色い火花や青い光がチクチクとした感覚と一緒に、
現れては消える……。 誰かが私の体を触っているみたい……。
誰！！？？　怖い……。胸の中に激しい痛みと共に、ゾッとする感覚までこだまする……。
私を触ってるそのなにかは、私の足を持ち上げては下ろしたりして楽しんでたかと思えば、
枕をひっぱろうとしたり、私の手や顔を、ペタペタとなでまわす……。
　「い…、いや…。」

　だんだん意識まで遠くなってきた……。

　私はこのまま死んじゃうの……。

藤姫偃息図衆　第七夜　無常の理　其之二幕

　「く…、苦しい……。だれか、助けて……。」

声をあげようにも、私はもう、ほとんど声を出す事もできなかった……。
　「まだ死にとうない……。いやだ！！まだ死にたくない！！
私はまだ、恋というものをした事がない……。
この手で男の人の体を触った事もない……。
私も、他の女中たちみたいに、加代みたいに、恋をしたり、
男の人の腕に、優しく抱かれてみたい……。」

　人として生まれたのは誰しも同じはずなのに、何故、生まれた時から
私は心の臓の病気なんか持って生まれてきたんだろう……。

　何故、一生懸命光の指す方を目指して生きたいと思うのに、
眼の前にはいつも、闇が指す運命ばかりを歩く人がいるんだろう……。

　それとは逆に、光しか知らない人がいるのだろう……。
分からない……。私には分からない……。

　人はみな、幸せになりたいはずなのに、なぜ、幸せな人と不幸な人がいるの……。

　私は、何故、純粋に恋をしてみる事すら許されなかったの……。

　人はなんのために生きているの？？

　人はなんのために死ぬの？？

　私は死ぬためだけに生まれてきたの？？

　赤い三日月……、私がわけも分からず怖かったのは、それが私の命日になる日だったから……。
　藤姫の脳裏には、おそらく一瞬の事だっただろう……。
様々な思いが言葉となって浮かんでは消えた……。
　声にもならない声で、藤姫は必死に、今の自分の切なる願いを誰でもいい！！
私の部屋の前をドタドタと走る兵隊の誰でもいい。
乳母でもいい。女中でもいい。 誰かに拾ってほしかった。
　ただ、それだけの事なのに、誰も、私に気づいてくれない……。
苦しい。怖い。誰でもいい！！誰か、私を助けて！！！！
　ゴトッ……。不意になにか、部屋の中で音がしたような気がする。
しかし、目を開いて部屋の中を見渡しても、いつもの部屋と変わらない。
ふと、私の横たわってる布団の横を見ると、黄色や青の光が時折うごめく、
黒い煙みたいなものが、ずっと私の手や足を撫でていた……。
煙の中からは、時々、とてつもなくくぼんだ大きな目をした、
人間の赤ん坊の ようなものが、じっと、私の顔をまばたき一つせず見つめている……。
私はあまりに怖くて、声も出なかった……。

　「…め…、姫様！姫様！」
どこかで聞いた事がある声がする！！
その瞬間、胸のつかえが、一度にとれたような感覚を覚えた。
一瞬の暗闇が訪れて消えた後、目の前には、私の安心できる人が
そこにいた。

夜叉丸だった……。

藤姫妖綺譚

http://p.booklog.jp/book/50936

著者 : ひろべえ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/amaterasumami/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/50936

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/50936

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.